

# AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科) (2016.12) 平成28年度:7-8.

外来がん化学療法を受ける患者のセルフケアへの思いー文献からの変化  
—

小林 早紀, 能登 ちなみ

# 外来がん化学療法を受ける患者のセルフケアへの思い —文献からの変化—

小林早紀 能登ちなみ  
(指導：荒ひとみ)

## 緒言

厚生労働省の人口動態統計の年間推計<sup>1)</sup>によると、日本の死因別死亡数は悪性新生物が最も多い。近年、患者のQOLの重視とがん対策基本法改正による外来がん化学療法の充実化に伴い<sup>2)</sup>、自宅でがんとともに生きていくという患者が増加傾向にある。自宅という医療者が24時間患者を見守ることができない環境の中で患者は様々な思いを抱えながら自分自身で体調管理を行う必要性がある。先行研究<sup>3)</sup>では、身近な相談相手や質問しやすい医療者がいる患者は自己効力感が高いこと、対象がセルフケアを継続するためには、外来の相談機能の意義が高いことが述べられていた。そこで本研究では、外来がん化学療法を受ける患者のセルフケアへの思いの変化を明らかにすることを目的に文献検討を行う。

## 方法

**研究対象：**2000年から2016年までの化学療法中の思いについての文献を、医学中央雑誌 Web を用いて検索した。キーワードは「外来」「がん」「化学療法」「思い」とし、原著論文、看護研究、抄録ありで検索を行い、がんの種類は問わず、成人から老年期の化学療法中にあるがん患者という条件に基づき選定した。

**分析方法：**文献の中のすべてのカテゴリを意味内容に沿って分類した。次に2000年から2005年(A期)、2006年から2010年(B期)、2011年から2016年(C期)と5年ごとに区分しセルフケアがどのように変化してきているか分析した。

**定義：**「セルフケア」=自立または協力を得ながら生命や健康生活を守ろうと行う活動、またその能力。例として、食事管理、内服管理、副作用管理。以下、抽出した大カテゴリを【】、中カテゴリを〈〉、文献の中のカテゴリを《》とする。

**倫理的配慮：**先行研究として引用・参照した文献を明示した。

## 結果

### 1. 思いの内容の内訳と分類

選定された文献は105件で、うち43件を研究対象とした。A期の文献は10件、B期の文献は16件、C期の文献は17件であった。内訳は、年齢別では60代以上が8件(18.6%)を占め、疾患別では女性器が10件(23.3%)、消化器が7件(16.3%)、呼吸器が2件(4.7%)、泌尿器が1件(2.3%)であった。再発の有無では再発が4件(9.3%)であった。43件の文献のカテゴリ数は全部で446個で、これらを意味内容の類似性で分類した結果、【セルフ

ケア】【病気】【治療】【生活】の4個の大カテゴリが抽出された。このうち【セルフケア】が最も多く217個であり、全体の48.7%を占めていた。3期で分けると、【セルフケア】のカテゴリ数はA期50個、B期72個、C期95個であった。

### 2. セルフケアの変化

【セルフケア】からは〈支援体制〉〈副作用〉〈体調管理〉〈情報収集〉〈受診行動〉〈食事〉〈内服管理〉の7個の中カテゴリが抽出された(図1)。中カテゴリの中で最も多かったのは〈支援体制〉であった。文献中のカテゴリには《家族・周りの支え》《医療者の支援》《同病の配偶者の存在》などの家族 4)6)7)10)11)13)14)15)17)18)19)21)22)24)25)26)27)29)30)31)33)36)37)38)39)40)41)42)44)45)46)、医療者 4)6)7)9)11)13)14)15)18)19)21)24)25)26)28)29)31)33)34)36)39)41)42)44)46)、同病者 4)10)15)21)25)33)からの支援に関する思いが含まれていた。3期のすべての時期で支援者として家族・友人が最も多く、次に医療者、同病者であった。《家族・周りの支え》《自分が支えられているという気持ち》《24時間安心できる体制》といったカテゴリ 4)6)7)9)10)13)14)15)17)18)19)21)22)24)25)26)27)28)30)34)36)37)38)40)41)42)43)44)46)が多数を占めた。しかし、《家族への申し訳なさ》《病院の外にいるために病状を管理されないことに対する不安》といったカテゴリ 4)25)29)39)45)があった。また《相談できる人がいない》といったカテゴリ 10)29)44)もあった。その他には、《今後を見据えた、かかりつけ医との関係維持》《医療の負担軽減を図る各種制度》《相談・話を聞いてくれる人がほしい》といったカテゴリ 4)9)11)17)25)28)29)35)37)39)41)44)45)があり、それらはC期に最も多かった。

その次に多かったのは〈副作用〉であった。A期では《副作用による身体的苦痛を抱えている》であったが、B期、C期では《副作用の理解と自宅での対処》《副作用の苦痛軽減や悪化予防の対応》といったカテゴリが増えていた。

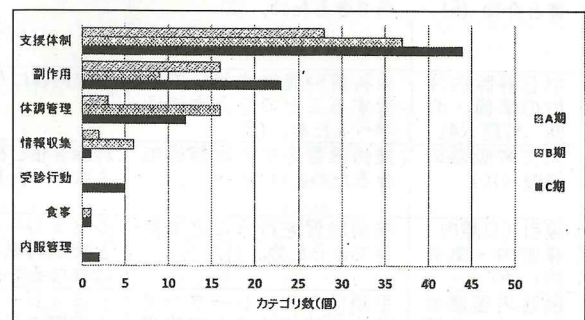


図1. セルフケアに関するカテゴリ



一方で〈情報収集〉〈受診行動〉〈食事〉〈内服管理〉の中カテゴリは少なかった。B期では《治療に関する情報がほしい》などの〈情報収集〉<sup>5)25)32)38)41)</sup>に関するカテゴリ、C期では《食べるための工夫や努力をする》《内服遂行に孤軍奮闘する》《受診に対する思い》といった〈食事〉<sup>4)27)</sup>、〈内服〉<sup>16)</sup>、〈受診〉<sup>4)5)9)</sup>に関するカテゴリが多かった。

### 考察

抽出された4個の大カテゴリは【セルフケア】【病気】【治療】【生活】であった。その中で【セルフケア】が最も多かった。このことから、セルフケアへの関心の高さ、患者がセルフケアへ様々な思いを持ちながら生活していることが考えられた。またA期からB期、C期と時代が進むにつれ【セルフケア】が増え、意識が高まっている。このことは、2006年の診療報酬改定、2007年のがん対策基本法改正<sup>2)</sup>によって外来化学療法が推進され、セルフケアをしながら通院を続けていかなければならないという患者の背景を示しているのではないかと考える。【セルフケア】で最も多く抽出されていたのは〈支援体制〉であった。3期すべての時期で家族からの支援に関するカテゴリが多かったことから、周りからの支えが患者の生活に大きな影響を及ぼしていることが考えられる。また、支援体制の不足、今後への要望や不満に関するカテゴリが増加している。このことは、新たな患者の不安や心配、負担が大きくなっていることを示している。そのため、それらを軽減する援助をしていく必要があると考えられる。

次に〈副作用〉が多いことから、実際に自分の身体に現れる症状であるため、関心が高いことが考えられる。また年代が進むにつれて、症状そのものへの思いのカテゴリが減り、症状への対処行動のカテゴリが増えている。これは医薬品の研究が進み<sup>2)</sup>、副作用の軽減がされていること、セルフケアへの意識の高まりが要因として考えられる。以上、これらのことに対応するため、外来がん化学療法を受ける患者のセルフケアへの思いの変化から外来の看護がよりいっそう重要になると考えられた。

### 結論

1. 支援体制が患者の生活において大きな影響を及ぼしているため、患者の不安や心配、負担を軽減できるように相談体制の強化が必要である。
2. 患者自身で副作用症状への対処ができること、意欲を失わないように援助していくことが必要である。

### 引用文献

1. 厚生労働省平成27年(2015)人口動態統計の年間推計  
http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikiei15/dl/2015suikiei.pdf
2. 厚生労働省平成18年(2006)がん対策基本法  
http://www.mhlw.go.jp/shingij/2007/04/dl/s0405-3a.pdf
3. 林亜希子,他(2010):外来がん化学療法患者における自己効力感の関連要因,日本がん看護学会誌,24(3),2-11.
4. 奥村美奈子,他(2016):外来化学療法を受けている高齢がん患者の療養生活の現状,岐阜県立看護大学紀要,16,1,97-103.

5. 加久瑠子,他(2016):婦人科がん治療後の下肢リンパ浮腫が増強した患者の外来受診に至るまでの体験の分析,山口県看護研究会学術集プログラム集録,15回,14-16.
6. 神里敬子,他(2014):外来化学療法を受ける患者の思いの特性(ニーズ)から外来看護師に求められる看護支援,沖縄県立中部病院雑誌,40,16-20.
7. 神谷潤子(2015):化学療法を受けている再発がん患者の希望の維持に影響するソーシャル・サポート,日本赤十字看護学会誌,15,1,11-19.
8. 三木幸代,他(2014):オキサリプラチンによる末梢神経障害をもつ進行再発大腸がん患者の体験,日本がん看護学会誌,28,1,21-29.
9. 安原陽子,他(2014):外来化学療法を受ける患者の外来診察時の思い,日本看護学会論文集:成人看護II,44,43-46.
10. 柘植美樹,他(2014):外来通院により化学療法を受けている患者の気持ち,日本看護学会論文集:成人看護II,44,39-42.
11. 森本悦子,他(2014):地方都市で外来化学療法を継続する高齢がん患者の困難とニーズ,関東学院大学看護学会誌,1,1,1-7.
12. 松野里見,他(2013):BCG膀胱内注入療法を受ける患者のセルフケア能力を引き出す看護支援,山口大学医学部附属病院看護部看護研究集録,26-31.
13. 飯岡由紀子,他(2013):ホルモン治療中の閉経前乳がん女性の苦痛と対処の構造,日本がん看護学会誌,27,2,16-25.
14. 小杉恭子,他(2013):独居・夫婦世帯の高齢がん患者の治療意欲を支えた要因の分析:外来化学療法を受ける悪性リンパ腫患者の体験を通して,日本看護学会論文集:老年看護,43,102-105.
15. 六車良子,他(2013):抗がん剤を内服している高齢患者の思い:看護支援のあり方を探る,香川県看護学会誌,4,12-15.
16. 戸田くるみ,他(2012):進行大腸がん患者の経口抗がん剤外来治療継続過程における思い,お茶の水看護学雑誌,7,1,20-29.
17. 桑原莉沙,他(2012):外来で術後化学療法を受ける乳がん患者の夫婦生活と看護の役割,日本看護学会論文集:成人看護II,42,187-190.
18. 小枝美由紀,他(2012):外来化学療法を受ける乳がん患者の在宅における看護支援ニーズについての検討,日本看護学会論文集:地域看護,42,88-91.
19. 内藤小雪,他(2010):外来化学療法を受けている進行がん患者の療養生活上の思いと療養生活の主體的な継続を支える看護のあり方,日本看護学会論文集:成人看護II,41,224-227.
20. 船橋真子,他(2011):外来化学療法を継続する進行肺がん患者の抱える問題,人間と科学:県立広島大学保健福祉学部誌,11,1,113-124.
21. 許田志津子(2011):外来化学療法を受ける患者にとっての悪性リンパ腫とともに生きる体験,大阪大学看護学雑誌,17,1,7-15.
22. 森井泉小百合,他(2009):ポート挿入(皮下埋め込み型リザーバー)による外来化学療法を受ける患者の思い,長野県看護研究会論文,30,19-21.
23. 原田あさ美(2010):化学療法を続けた中で食道狭窄による食事摂取の困難を経験した食道がん患者の体験,神奈川県立がんセンター看護師自治会看護研究会看護研究集録,16,90-96.
24. 山田恵子,他(2010):外来で分子標的治療を受けているがん患者に対するナラティブ・アプローチ,日本がん看護学会誌,24,3,12-21.
25. 澤田みゆき(2009):外来化学療法を受ける肺がん患者のニーズ,日本看護学会論文集:看護総合,40,213-215.
26. 中塚信江,他(2009):外来で化学療法を行っている患者の思い:聴き取り調査を通して,中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究会誌,5,209-212.
27. 野原友愛(2009):日帰りがん化学療法を受ける患者の思いに対する調査,中国四国地区国立病院機構・国立療養所看護研究会誌,5,217-220.
28. 鍋島美保,他(2008):治療室のない病院で外来化学療法を継続している患者の治療環境に対する思い,国立高知病院医学雑誌,17,47-52.
29. 齊田菜穂子(2009):外来で化学療法を受けるがん患者が知覚している苦痛,日本がん看護学会誌,23,1,53-60.
30. 物部千穂(2008):外来で化学療法を受けるがん患者の体験:婦人科がん患者2名へのインタビュー結果から,日本看護学会論文集:成人看護II,39,382-384.
31. 足立直子(2009):継続癌化学療法を受けている癌患者の生活上の困難と対処,松江市立病院医学雑誌,13,1,23-32.
32. 内山里枝,他(2008):外来化学療法を受ける患者と共に考えるセルフケア支援,日本看護学会論文集:看護総合,39,269-271.
33. 北添可奈子,他(2008):外来化学療法を受けるがん患者の“前に向かう力”,日本がん看護学会誌,22,2,4-13.
34. 清水睦美,他(2007):外来で化学療法を行なう患者の治療にかける思い,日本看護学会論文集:成人看護II,38,227-229.
35. 鹿内愛恵,他(2006):退院後外来で化学療法を継続する患者が感じる思い,日本看護学会論文集:成人看護II,37,398-400.
36. 澤田直美,他(2007):繰り返し化学療法を受ける婦人科悪性腫瘍患者の不安・抑うつ程度とセルフケア行動を促す要素,岐阜県母性衛生学会雑誌,37,9-13.
37. 林寿美,他(2005):外来で化学療法を受けている患者の不安要因についての分析,日本看護学会論文集:成人看護II,36,51-53.
38. 山田美由紀,他(2005):外来がん化学療法を受ける患者の抱える懸念の分析,日本看護学会論文集:成人看護II,36,48-50.
39. 伊藤民代,他(2004):STAI スコア状態不安が高得点を示した外来がん化学療法患者の不安内容の分析,群馬保健学紀要,25,69-76.
40. 石田和子,他(2004):外来で化学療法を受けている再発乳がん患者の日常生活上の気かりと治療継続要因,群馬保健学紀要,25,53-61.
41. 小川範子,他(2004):外来がん化学療法を受ける患者の心の痛みへの看護介入のあり方:患者18名からの手紙の内容分析をとおして,日本看護学会論文集:成人看護II,35,286-288.
42. 飯田恭子,他(2005):乳がん術後補助化学療法を受けている患者を支えているサポート:患者が看護師に求めるサポートとは,日本看護学会論文集:成人看護II,36,360-362.
43. 遠藤恵,他(2004):外来化学療法を受けている患者のおかれている生活状況に関する質的研究:QOLの低下とそれに影響を与える要因について,日本看護学会論文集:地域看護,34,61-63.
44. 工藤朋子(2004):外来で化学療法を受ける大腸がん患者が治療を継続する意味,岩手県立大学看護学部紀要,6,23-32.
45. 城田千佳子,他(2002):外来で化学療法を受けている患者の治療効果への思いと負担,高知県立中央病院医学雑誌,29,2,39-43.
46. 大塚洋子,他(2000):乳癌術後の患者の気持ちの変化と対処行動:外来で補助化学療法を受けている患者へのインタビューの結果から,日本がん看護学会誌,14,1,53-59.